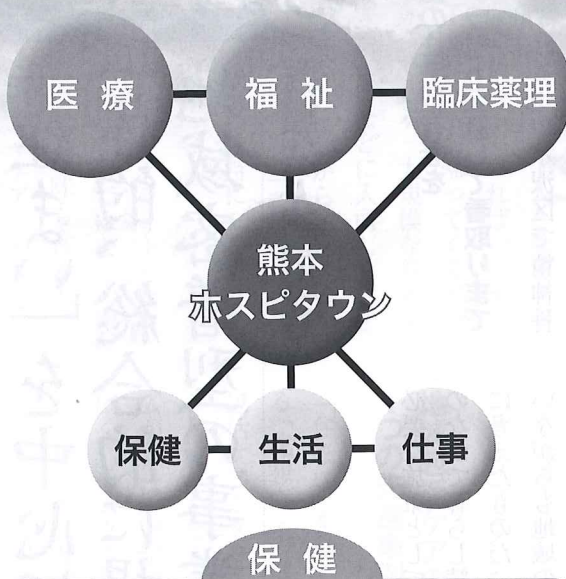


わが法人はこうなっている!

図 熊本ホスピタウン構想

医療・福祉・保健と生活の融合体



地域保健
地域基本健診、節目健診、乳児健診、予防接種

学校保健
学校医、学童保健衛生、学習環境、メンタルヘルスケア、学校スポーツ(部活)

産業保健
産業医、職場健診、労働環境、メンタルヘルスケア、健康教室、栄養教室、スポーツ大会(グランドゴルフなど)

生活

(計画中)
周辺のバリアフリーの住居生活ゾーンで、高齢者や障害者のための一戸建て住宅やアパート、グループホーム(対象者は、認知症高齢者だけでなく、慢性関節リウマチや片まひ、末期がんなどの方)などをつくり、希望があれば「にしくまもと病院」のオンラインによる緊急システムを整備する

仕事

(計画中)
仕事場づくり(歳をとっても、体が不自由でも、人のために何かができる、何かつくる楽しみがある、以前の仕事の経験が活かせる、そしてわずかでも収入になる生きがいの場)、生きがいセンター

ふれあい農園
(農業・園芸・貸し農場・農業指導)

ショッピングプラザ
(生きがいセンター、農園や地域でつくったものの販売)

義肢装具研究所
(福祉工場、福祉機器、車いす、自助具、装具などの製作修理を行う場)

な地道な努力により、住民から地域に必要な病院と思われるようになっていった。「ホスピタウン構想」では、当院が地域をつなぐハブとしての役割を担うことになっていきます。それには自院の経営安定と必要な医療を提供すればいいという考えでは成り立ちません。地域を活性化させ、住民が必要とする機能を町に持たせる、町づくりまで考えています。

中小病院の生き残りのためには各医療機関との連携が欠かせないが、同院では訪問診療を行うことで有料老人ホーム等との連携も強めてきた。林院長は、「1つの法人があらゆる機能を持つことで完結するのではなく、他法人と一緒に町づくりを進めていくことで地域が一体化していくと思います。医療の部分は当然、医師がかかわりますが、高齢社会においては生活まで見る福祉の視点も今後の医療には必要。職員に対しては、機会があるごとにホスピタウン構想について説明しています。それにより少しずつ理解は深まっています。今後は、連携した施設の質を上げるといったことにも積極的にいかかわっていかなくてはなりません」と力を込める。

現に向けて、地域づくりにも着手している。病院に直結し、看取りまで対応できるサービス付き高齢者向け住宅「ホスピタウンハウス」を14年1月に開設する予定。また、薬局やレストラン、鍼灸院、保育所を誘致した「富合メデイカルタウン」が完成した。林院長は「地域住民、患者さんからの要望の多い眼科、耳鼻咽喉科、小児科の施設を誘致していきたいと思っています」と、今後も病院周辺に必要な施設を整備していく考えだ。

30年後は高齢者のみならず人口減が地方都市において、深刻な状況となる。林院長はそれを見越して、定住者を増やすための地域づくりを念頭に置く。その1つの策として、シニア世代のUターンの推進を考えている。「都市部では高齢者が必要とする医療や介護を提供する施設が圧倒的に足りなくなりますが、熊本だと十分確保できます。病院周辺に、リハビリを提供しながら高齢者が自立して生活できる一戸建てのバリアフリー住宅を建てるのも一案です。地域に暮らし、お金を落とすことで地域が増えれば雇用も増え、地域活性化につながります。その役割を担える病院づくりに向けて邁進していきたいです」

30年先の法人はどうなっているか

4 CASE

住民が安心して暮らせる町づくりのハブの役割を病院が担う

医療法人相生会

病院の建て直しの旗印としてホスピタウン構想を発売

医療・福祉・保健と生活の融合体として地域社会の健康づくりに寄与するという「熊本ホスピタウン構想」。ホスピタウンは「ホスピタル」と「タウン」を組み合わせた造語で、医療・福祉・臨床薬理・保健・生活・仕事の6つのゾーンの充実を図ることで、住民が安心して暮らせる町づくりを行うというものだ(図)。厚生労働省が推進する地域包括ケアシステムに通底する考え方である。具体的には病院を核に地域のハブとして機能させ、その周辺に医療・介護施設や在宅事業所、交流センター、住宅を集め、予防から看取りまでをカバーするためのハードとソフトを整備する。

ホスピタウン構想は、法人のしくまもと病院の林茂院長が院長に就任直後の1993年に提唱した。「祖父の看取りの経験から、住み慣れた地域、家で平穏に最期を迎えられることのよさを思っていました。しかし実質的には病院の建て直しには大きな目標が必要で、いわば「旗印」として掲げたのが始まりです」と林院長は振り返る。

林院長の赴任当時、同院は旧来の老人病院といったネガティブな印象を地域住民に持たれていた。ホスピタウン構想を掲げたうえで、専門でもある「関節鏡視下手術」を導入し、住民の生活を医療面から支えたいとの視点からリハビリ機能を強化。必要なスタッフを集めたほか、理学療法室を増築した。さらに、職員公募により名称を現

在のものに改称するなど、従来のイメージを刷新させることで活性化を図っていった。

経営基盤が安定した2007年には、新病棟の建設を軸にした「新ホスピタウン構想」を発表。今後の病院像として、①予防から看取り、②在宅医療、③低侵襲手術、④入口から出口までのリハビリ、⑤臨床薬理——からなる「慢性期疾患の高度包括的医療センター」とした。「熊本市内は大規模な急性期病院が多く、当院の規模や機能を考えたらここに行き着きました。人工関節、関節鏡視下手術の実績は向上しています。今後は整形外科、泌尿器科、消化器科の内視鏡を強化することで特色を打ち出していきたいです」と林院長は

話を。12年に6階建ての新病棟が完成したことで、新しい医療機器の導入やリハビリ室を一新。それにより患者は増え、必要なスタッフを確保しやすい体制が整った。手術や最新検査、在宅医療等に取り組み「地域リハビリテーション病院」として認知されつつある。

他法人と連携した町づくりで地域の一体化につながる

林院長が特に力を入れたのは、地域とのかかわりを深めることだ。地元・富合町の町おこしの会に入会したほか、「関節鏡友の会」という患者組織をつくった。さらに祭りに冠婚葬祭まで、地域の行事に積極的に顔を出した。そのよう



林 茂 院長
はやし・しげる ● 1973年、熊本大学医学部卒業後、神戸大学医学部附属病院麻酔科で研修。熊本大学医学部附属病院整形外科、帝京大学医学部附属病院などで勤務。91年に副院長として入職。92年より現職。日本整形外科学会専門医、日本リハビリテーション学会臨床認定医